

氏 名： 松浦 志保

学位の種類： 博士（看護学）

学位授与年月日： 令和4年3月5日

学位記番号： 第24号

学位授与の要件： 学位規則第4条第1項該当

論文題名： 長期入院を要するハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を高める
プログラムの検討

A program aimed at increasing the readiness for parenthood in high-risk,
first-time pregnant women requiring long-term hospitalization and their husbands

指導教員： 教授 北山 秋雄

副指導教員： 教授 清水 嘉子（学外）

論文審査員： 主査 教授 柳原 清子

副査 教授 喬 炎

副査 教授 伊藤 祐紀子

副査 教授 渡辺 みどり

副査 教授 北山 秋雄

副査 教授 清水 嘉子（学外）

博士論文要旨

研究目的

ハイリスク初妊婦とその夫と正常経過をたどる初妊婦とその夫の親準備性の違いや特徴の比較、およびハイリスク初妊婦とその夫の親準備性に関連する要素の概念化により、親準備性が高まると考えられる支援を見出し集結させることでプログラムを作成し、対象に展開することによりその有用性と課題を検討することである。

研究方法

本研究は、混合研究法における収斂的デザインで構成した。ハイリスク初妊婦とその夫および正常経過をたどる初妊婦とその夫の比較<研究1>は、夫婦間コミュニケーション尺度、胎児への愛着尺度、親になる意識尺度、親になる自覚尺度、親になるイメージ尺度と自由記述で構成された無記名自記式質問紙を用いた量的記述研究を行った。続いて、半構成

的面接による質的記述的研究から親準備性に関連する要素の概念を抽出し、支援の根拠を見出した<研究 2>. その後、抽出された概念の背景に見出された支援の方向性に基づいて考察した対象にふさわしい支援を集結させたプログラムを検討し、対象への展開と実施前後の質問紙調査および実施後の聞き取り調査からその有用性と課題の検討を行った<研究 3>.

倫理的配慮

本研究は、長野県看護大学倫理委員会（2013-12）および島根大学医学部看護研究倫理委員会（355, 355-2）の承認を受けて行った。

結果

研究 1 の正常群 16 組とハイリスク群 9 組の比較によるハイリスク群の特徴として、ハイリスク初妊婦の「生まれてくる子どもの心配・不安」が有意に高かった。また、親になる意識の中でも「親になる実感・心の準備」で初妊婦と夫間に差があり、親になる自覚や親になるイメージが高まりにくい様相があった。また、研究 2 の対象（ハイリスク初妊婦 11 名・夫 6 名）の親準備性に関連する要素は、初妊婦の『親となる基盤をなす妊娠の受け止め』と夫の『妊娠前の個人背景に影響される妊娠の受容』、『良好な夫婦関係の上で高まる対話の意義』と『共有する意義を持つ相互的夫婦関係』、『親実感の起点である胎児存在実感』と『夫を親にする胎児存在実感・体感』、『「親」という新たな役割の認識』、『親としての自己の模索』、『親になるうえで治療しながら妊娠継続することの副作用』と『親になることへの入院の副作用』といった初妊婦と夫に共通および類似する概念とハイリスク初妊婦のみにあった『親になる準備に懸念される夫との温度差』、『親になる負担感との共存』、夫のみにあった『妊婦を支えながら親になるということ』の特有な概念で説明付けられ、その概念をもとに 7 つの支援の方向性を見出した。さらに研究 3 にて研究 1 の結果や研究 2 における支援の方向性に文献的考察を加え、この時期の対象に副う支援を検討後に集結させることでプログラムを作成した。プログラムは 7 つのねらいを掲げ、「ハイリスク初妊婦とその夫が、想定外の環境に置かれた中でも、親となることへの負担感を感じることなく、相互的な夫婦の関係性を築きながら、胎児存在実感を持ち、親になることへの思いや考えを共有することで、親になるイメージ、意識、自覚が明瞭になり、胎児への愛着を高めながら親になる準備を整えることができる」を最終目標とし、1 組の対象に事例的に展開した。その結果、夫婦間コミュニケーション尺度をはじめとする 5 つの評価尺度に実施前後の顕著な変化は見られなかったが、親になるイメージ・親になる自覚・親に

なる意識の主観的評価から認知的側面への有用性が示唆された。

考察

親準備性における親になるイメージ、親になる自覚、親になる意識の認知的側面は、妊娠の受け止め、胎児存在実感、養育環境の振り返りから描出される自己親イメージ作りといった、ハイリスク初妊婦とその夫の対話と胎児存在実感共有を基調としたプログラムにより醸成される可能性が示唆された。プログラムにより促進された妊婦側の胎児への愛着行動は、夫婦間のコミュニケーションを促し、夫の胎児に向ける気持ちの高まりや親になるイメージ・親になる自覚・親になる意識に良い影響をもたらしたと考えられた。胎児への愛着形成は、親になるイメージなどの親準備性の認知的側面の高まりに付随する可能性も示唆されることから、このプログラムにハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を高める可能性が示された。今後は、症例数を重ねてプログラム内容の評価をかさね、プログラムの検証を実施していく必要がある。

看護への示唆

周産期にリスクを持つ妊産婦およびそれを取り巻く家族は、今後も増加することは必至である現状の中で、本研究の知見はリスクを持つことで生じる心理社会的な影響を受ける対象に副ったケアの構築につながる。また、ハイリスク初妊婦とその夫が長期入院を強いられた中でも、そのことに抑圧されることなく、ともに親になることを意識し、親になるイメージや児への愛着を高められるケアを構築することは、親への移行の難しさを緩和し、その後のコペアレンティング（夫婦協同育児）へのスムーズな移行を支える看護の質、ケアの向上に貢献することができる。

さらに、長期入院を要するハイリスク初妊婦とその夫に向けた親準備性を高める支援は、対象の置かれる状況の特性や事情から個別に行われているのが現状であり、体系的なプログラムはわが国には存在しないことから、根拠のある支援に基づいたプログラムの構築は、看護学領域、母性看護学領域、助産学領域に学術的な貢献がもたらされる。

今後の課題

今後は、1) プログラム検証のためのさらなる症例数の確保、2) 親になる自覚・イメージといった認知的側面の簡便で有効な測定方法の検討、3) プログラムの実用化をしていくうえでの専門職者としてのファシリテーションスキルの向上、4) プログラムの精度を上げるための周産期専門家からの意見抽出の4点を行っていく必要があると考える。

論文審査結果の要旨

1) 論文要旨

本研究の目的は、ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を構成する要素の概念化により、親準備性が高まると考えられる支援を見出し、そのプログラムを作成し、対象に展開してその支援プログラムの有用性と課題を検討することである。本研究は、混合研究法における収斂的デザインで構成した。

<研究 1>は、ハイリスク初妊婦とその夫および正常経過をたどる初妊婦とその夫の比較を、夫婦間コミュニケーション等の 5 つの尺度と自由記述で構成された無記名自記式質問紙を用いて量的記述研究を行った。結果は正常群 16 組とハイリスク群 9 組の比較で、ハイリスク初妊婦の「生まれてくる子どもの心配・不安」が有意に高かった。また、親になる意識の中でも「親になる実感・心の準備」で初妊婦と夫間に差があり、親になる自覚や親になるイメージが高まりにくい様相があった。

<研究 2>では、質的記述的研究デザインを用いて親準備性を構成する要素の概念を、SCAT による分析方法で抽出し、支援の根拠を見出した。対象はハイリスク初妊婦 11 名・夫 6 名であった。結果、親準備性を構成する要素は、初妊婦の『親となる基盤をなす妊娠の受け止め』と夫の『妊娠前の個人背景に影響される妊娠の受容』、『良好な夫婦関係の上で高まる対話の意義』と『共有する意義を持つ相互的夫婦関係』、『親実感の起点である胎児存在実感』と『夫を親にする胎児存在実感・体感』、『親』という新たな役割の認識』、『親としての自己の模索』、『親になるうえで治療しながら妊娠継続することの副作用』と『親になることへの入院の副作用』といった初妊婦と夫に共通および類似する概念とハイリスク初妊婦のみにあった『親になる準備に懸念される夫との温度差』、『親になる負担感との共存』、夫のみにあった『妊婦を支えながら親になるということ』の特有な概念で説明付けられた。

<研究 3>は、研究 2 で抽出された概念から支援のプログラムを検討し、対象への展開と実施前後の質問紙調査および実施後の聞き取り調査からその有用性と課題の検討を行った。また、その概念をもとに 7 つのねらいのプログラムを作成し、それを使って 1 組の対象に事例的に展開した。その結果、親になるイメージ・親になる自覚・親になる意識の主観的評価から認知的側面への有用性が示唆された。

2) 審査結果

第 1 回目審査（令和 3 年 12 月 20 日）は、松浦氏による博士論文プレゼンテーション（40 分）の後、各審査委員との質疑応答がなされた。主な指摘は以下の 4 点である。

① 研究の適切性について

- ・第 1 研究での、統計分析結果の説明（相関係数や相関の内容）を正確に記述すること
- ・第 2 研究の分析方法に SCAT を用いる根拠と有効性を他の質的研究手法の限界性を踏まえて説明すること

② 創造的・独創的な研究であるかについて

- ・先行研究と本研究のデータを照らし合わせて、一致点や不足点などを明確にして論を進める必要があること
- ・海外論文が先進国の論文に限定されているので途上国の情報を追加すること
- ・文献検討に古い文献が散見されるので、再検討すること
- ・研究の構成として提示された図 1 と概念枠組みの図 2 が分かりにくい。先行研究からの仮説の図なのか、筆者が独創的なものとして作ったものなのか、図について解説をすること

③ 看護に貢献する成果に関して

- ・研究意義に引用文献を用いるのであれば、文献の内容を明確に述べた方が説明力が高まるので修正のこと

④ 看護学の新たな知見になっているかに関して

- ・両親学級、夫同伴の妊婦健康診査などの指導・関わりと異なることは何か、どこに新規性があるのか、説明を加筆すること

第 2 回目審査（令和 4 年 1 月 25 日）は、1 月 18 日に再提出された論文をもとに、修正点について、松浦氏から説明がなされ、各審査委員が適切に加筆修正されているかを確認した。修正は概ね適切になされていたが、一部＜研究の意義＞と＜研究の構成＞に関して、図の説明も含めての加筆が求められた。

第 3 回目審査（令和 4 年 2 月 2 日）は、上記指摘事項が赤字で修正された論文を審査委員全員で確認した。

本研究は、長期入院を要するハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を高めるプログラムの作成と検討を目的とした混合研究法を用いた研究であった。この混合研究法すなわち量的研究と質的研究アプローチを組み合わせることで、ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を構成する要素の概念化がなされ、エビデンスに基づいた 7 つのねらいをもつ支援プログラムを作成した点に独創性が認められる。

周産期においてリスクを持って過ごす妊産婦に行われる治療やその家族も含めて行われる支援は、ハイリスク妊婦に対する医学的管理に重きが置かれており、妊娠中から出産後にかけての母親自身、そして母親を取り巻く家族の心身の健康への支援、新生児の健やかな成長の保障、そしてその成長を保障する保育環境の整備・調整などのケアの視点は脆弱であり、欧米等においても（医療保険制度の異なりもあり）それらは取り組まれていないものである。そこに焦点をあて、妊娠中期に停滞、低下傾向にある（下がってしまう）「親準備性」を高めるプログラム開発と介入を行った点に本研究の新規性がある。

本研究で述べる『ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性にある、親になるイメージ・自覚・

意識の認知的側面には、妊娠の受け止め、胎児存在実感、養育環境の振り返りによる自己親イメージ作りといった初妊婦と夫で共有できるプログラムの提供が有用であること、そしてそれにより、促進された妊婦側の胎児への愛着行動は、夫婦間コミュニケーションを促進させ、夫の胎児愛着の高まりや親になるイメージ・自覚・意識のさらなる高まりをもたらす』という結果は、新たな知見であると同時に、助産現場および助産学の発展に寄与するものである。

今後の課題として、コロナ禍で中断せざるをえなかったプログラムの検証事例を積み重ねていかれることを期待したい。

以上により、本学学位規定第4条第1項に定める博士（看護学）の学位授与にふさわしいものと認め、最終試験に合格と判断した。